

私立普通科高校の教育課程と教育成果

— 校長調査から —

南 本 長 穂

はじめに

1980年代の臨時教育審議会の答申以降、「改革」は教育の分野だけでなく、社会全体の特徴を象徴するキーワードになっている。「教育改革」の必要性が叫ばれ、取り組むべき課題が多方面から論議されている。もちろん、教育の分野では、改革の議論の中心に置かれているのは学校教育である。ただし、改革という言葉は、既存の教育の制度や運用のし方をすべて壊して、全く別のものを打ち立てることを指すのではない。改革を英語で表現すれば、リニューアル (renewal) であり、刷新とか再生という意味で捉えられる。社会の変化により対応でき、より成果を上げることができる制度の構築やその運用のあり方を模索する作業全体を指して、改革という言葉を使う。本稿は、こうした改革の動向を踏まえながら、「改革」の叫ばれる教育の現状に着目し、そこにどのような問題や課題が存在しているのかを視野に入れながら、改革に少しでも貢献できる数量的データを提供できるかという着想からはじめた。

我が国における高校教育の1980年代以降の改革をみると、さまざまな改革が行われていることがわかる。例えば、制度面では、学科構成では普通科と専門学科の2本立てで構成されていたが、総合学科や6年制の中等教育学校が創設され、制度面での多様化が進んだ。また、定

時制にも、昼夜開講制の高校が開設された。通信制高校は社会の変化や生徒の生活や学習の状況に対応したことで生徒数の増加が著しい、といった特徴もみられる。教育内容面をみても、科学技術の進展や国際化に対応した教育内容の編成が求められ、特色ある教育を生み出す学校設定科目・学校設定教科が教育課程に位置づけられるようになった。さらに、高校入試制度の改革や高大連携の推進等により、従来の高校教育に多大の変化がもたらされてきている。

しかし、こうした1980年代以降の高校教育に関わる制度や教育内容等の改革が、高校生の学習や活動にどのような影響や教育成果をもたらしてきているか。つまり、高校教育を支える制度の改革や教育条件の変化、及び教育内容の改訂によって、どのような教育成果が生み出されてきているのか。改革がもたらした近年の教育の成果をデータに基づく検証という点では必ずしも明らかになっていないのではない¹⁾。なお、高校改革が叫ばれて以降に実施してきた本調査時点において、わが国の高校教育の実証的な研究成果において、こうした各高校を単位とした教科科目の履修パターンに焦点に置いた教育課程の編成の現状を解明し、各高校の教育成果を実証的に検討した研究成果はみあたらない。

こうした教育改革がもたらす影響や教育成果の現状(実態)を明らかにし、検討していくと

いう研究の意図の基に、筆者は、これまでに実証的な調査研究を行い、以下の表序に示すような調査研究論文を発表してきた。

表序 これまでの各論考・調査研究の全体的な位置づけ

		一連の研究の全体的な構想			①		
調査対象	公立高校	普通科	校長・教員	⑧	⑫		
			高校生	⑦	⑨		
		専門学科	校長・教員	④	⑬	⑭	
		総合学科	校長・教員	②	⑤	⑩	
	私立高校	普通科	校長・教員	③	⑪		
			校長・教員	⑥	⑮		

注) ①から⑭は、これまで発表してきた論文・調査研究等、⑮は本稿

なお、表の①から⑭の論文題目は、本論文の最後に注として示している。最初に、取り組む一連の研究の企画構想を論文①に示し、その後、各論として、表に示すように高等学校の公立私立別、学科（普通科、専門学科、総合学科）別に研究を積み重ねてきている。

また、①から⑭までの論文題目等は、本論文末に示している注として、一括して示している。また、本研究に関連が深い実証的な調査結果に基づいた著書・論文は、この一連の研究報告の中で適宜取り上げている。

なお、筆者の行った②の調査研究から本稿までの一連の調査研究は、2010（平成22）年度から2012（平成24）年度の3年間にわたる科学研究費補助金（基盤研究（C））、課題番号22530937、研究課題「高校教育改革に取り組む教師の改革対処型指導力の形成過程」。及び、2013（平成25）年度から2015（平成27）年度の3年間（2016年度までの1年間延長）にわたる科学研究費補助金（基盤研究（C））、課題番号25381153、研究課題「高校教育の成果を生み出す高校教師の指導力の類型化とその形成過程」に実施している。

さて、これまでの研究の延長線上にあり、表序に位置づける論文⑮の本稿では、私立高校の教育課程編成の現状を理解し、教育成果をどの

ように捉えているかに焦点を合わせており、とくに、次のような点を明らかにすることを意図して企画してきた。

1つは、平成30年における高等学校学習指導要領の改訂に向かうなかで、私立普通科高校では、どのような教育課程の編成を実施しているのか。その現状を押さえておきたい。また、教科・科目の履修方法の現状、及び教育課程編成に関する個々の高校が考える改善点を探る。

2つは、校長のみた私立普通科高校生の特徴を探り、私立高校の教育方針の達成に関する校長の認識を明らかにする。

3つは、私立普通科高校の教育成果を、5つの指標を設定し、検討していく。

なお、本調査では、私立高校（普通科）に焦点を合わせることにした。調査は、2017（平成29）年2～3月に1100校を対象（校長宛）に郵送法で実施した。有効回答数は390校。有効回答率は35.5%。

1. 調査回答高校の概要

調査回答高校（390校）を概観すると、次の通りである。なお、括弧内は高校数。

・高校の所在地区

1) 北海道・東北	12.1% (47)
2) 関東	30.5% (119)
3) 中部	15.4% (60)
4) 近畿	18.2% (71)
5) 中国・四国	13.6% (53)
6) 九州・沖縄	10.0% (39)
無答	0.3% (1)

・学科構成は

1) 普通科のみ	72.8% (284)
2) 普通科と専門学科（理数科等）	6.4% (25)
3) 普通科と専門学科（商業等）	20.0% (78)

4) 普通科と総合学科 0.8% (3)

- ・普通科1学年(年次)にコース設置の有無
- 1) コースの設置 74.9% (292)
- 2) コースの未設置 25.1% (98)

- ・平成28年度入学した1年次生の男女比
- 1) 男子のみ的高校 9.2% (36)
- 2) 男子の比率が高い高校 51.8% (202)
- 3) 女子の比率が高い高校 20.5% (80)
- 4) 女子のみ的高校 17.4% (68)
- 無答 1.0% (4)

- ・中学校併設の有無
- 1) 併設している 57.4% (224)
- 2) 併設していない 41.8% (163)
- 無答 0.8% (3)

- ・同じ学校法人に属する大学(短大)の有無
- 1) 同じ学校法人にはない 49.5% (193)
- 2) 同じ学校法人でないが、優先的に入学できる提携大学(短大)がある 3.8% (15)
- 3) 「〇〇大学(短大)附属高校」という校名 11.5% (45)
- 4) 附属高校という名ではないが、同じ学校法人に属する大学(短大)の名を冠する 21.3% (83)
- 5) 同じ学校法人だが、名前は別 12.1% (47)
- 6) その他 1.5% (6)
- 無答 0.3% (1)

- ・大学短大への進学率(平成28年3月時点)卒業生数に占める大学短大への進学者数を算出し、下記の区分を設定²⁾。無答は除外。
- 1) 上位校(79.0%以上) 30.7% (115)
- 2) 中位校(57.1~78.9%) 36.8% (138)
- 3) 下位校(57.0%以下) 32.5% (122)

2. 普通科の教育課程編成

1) 6つの教科にみる教育課程編成

本調査を実施した平成29年2月時点の教育課程編成の基準は、平成21年3月公示の高等学校学習指導要領である。そして、教科・科目、総合的な学習の時間及び特別活動によって普通科の教育課程は編成されている。なお、卒業までの履修単位数は、各教科・科目の単位数並びに総合的な学習の時間の単位数を含め74単位数以上で構成されている³⁾。

本調査の報告では、最初に、普通科の教育課程編成の柱となる教科・科目、すなわち、学習指導要領では「各学科に共通する各教科・科目」という名称で位置づけられており、その中から、6つの教科(国語、地理歴史、公民、数学、理科、外国語)を取り上げて、科目構成の状況をみていく。

まず、国語をみる。学習指導要領で示されている科目は、表2-1の注に示めす6科目である。そして「必修科目」としては「国語総合」(標準単位数4単位)が指定されている。

表2-1 国語の履修

	計
1. 国語総合+2科目	36.7 (143)
2. 国語総合+2科目+学校設定科目	9.5 (37)
3. 国語総合+3科目	24.6 (96)
4. 国語総合+3科目+学校設定科目	4.4 (17)
5. 国語総合+4科目	8.5 (33)
6. 国語総合+4科目+学校設定科目	1.5 (6)
7. 国語総合+5科目	5.9 (23)
8. 国語総合+5科目+学校設定科目	1.0 (4)
9. 国語総合	3.1 (12)
10. 国語総合+学校設定科目	1.8 (7)
無答	3.1 (12)
	100.0% (390校)

注)

1. 科目は、国語総合 国語表現 現代文A 現代文B 古典A 古典B
2. 「必修科目」は、「国語総合」

表2-1をみると「国語総合+2科目」の設定が最も多く、次いで「国語総合+3科目」の設定が多い。約6割の高校がこの2つのうちのどちらかの設定である。

なお、各高校が設定している科目履修のタイプ（科目の構成のし方）としては43パターンみられた。少しデータを詳しくみていくと、次のような科目構成のし方があった。

- ・「国語総合+現代文B+古典B」・・・34.9%
(136校)
- ・「国語総合+国語表現+現代文B+古典B」
・・・15.9% (62校)
- ・「国語総合+現代文B+古典A+古典B」
・・・6.4% (25校)
- ・「国語総合+現代文B+古典B+学校設定
科目（国語演習とか古典演習）」・・・6.2%
(24校)
- ・「国語総合+国語表現+現代文A+現代文
B+古典A+古典B」・・・5.9% (23校)

なお、上位2つの構成のし方が全高校の約半数を占めるのに対して、全高校の中で科目構成のし方が当該の1校のみという場合もある。そうした高校は23校を数える。また、同じ科目構成のし方が2校だけにみられたのは4例。3校で同じ科目構成のし方がみられたのは2例。この結果から、各高校において、多様な科目構成のし方を行っていること、がわかる。

次に、地理歴史をみる。学習指導要領で示されている科目は、表2-2の脚注に示めす6科目。「必履修科目」は世界史A（標準単位数2単位）及び世界史B（同4単位）のうちから1科目並びに日本史A（同2単位）、日本史B（同4単位）、地理A（同2単位）、及び地理B（同4単位）のうちから1科目である。

表2-2 地理歴史の履修

	計
1. 4科目	29.6 (113)
4科目+学校設定科目	3.6 (14)
2. 5科目	21.8 (85)
5科目+学校設定科目	1.8 (7)
3. 6科目	17.4 (68)
6科目+学校設定科目	3.1 (12)
4. 3科目	13.3 (52)
3科目+学校設定科目	0.8 (3)
5. 2科目	3.6 (14)
2科目+学校設定科目	1.0 (4)
6. その他	1.0 (4)
無答	3.6 (14)
	100.0% (390校)

注)

1. 科目は、世界史A 世界史B 日本史A 日本史B
地理A 地理B
2. 「必履修科目」は地理歴史のうち「世界史A」及び「世界史B」のうちから1科目並びに「日本史A」、「日本史B」、「地理A」及び「地理B」のうちから1科目

各高校が設定している科目履修のタイプ（科目の構成のし方）は59パターンみられた。そのなかで、次のような科目構成のし方が順に多い。

- ・「世界史A+世界史B+日本史A+日本史B
+地理A+地理B」・・・17.4% (68校)
- ・「世界史A+世界史B+日本史A+日本史B」
・・・11.3% (44校)
- ・「世界史A+世界史B+日本史A+日本史B
+地理B」・・・8.7% (34校)
- ・「世界史A+世界史B+日本史B+地理B」
・・・6.9% (27校)
- ・「世界史A+世界史B+日本史A+日本史B
+地理A」・・・6.2% (24校)

なお、上位3つの構成のし方が全高校の40%弱程度に対して、全高校の中で科目構成し方が当該の1校のみに限られるのは25例。そして、同じ科目構成のし方が2校だけにみられるのは4例。3校だけにみられるのは10例。この結果から、各高校において、多様な科目構

成のし方を行っていることがわかる。

次に、公民をみていく。学習指導要領で示されている科目は、表2-3の脚注に示す3科目。「必修修科目」は「現代社会」（標準単位数2単位）、又は「倫理」（同2単位）・「政治・経済」（同2単位）である。各高校が設定している科目履修のタイプ（科目の構成のし方）は24パターンみられた。そのなかで、次のような科目構成のし方が順に多い。表1-3をみると「現代社会」「倫理」「政治・経済」の3科目履修のパターンが最も多く、40.8%（159校）を占めている。

表2-3 公民の履修

	計
1. 現代社会、倫理、政治・経済	40.8 (159)
現代社会、倫理、政治・経済+学校設定科目	3.6 (14)
2. 現代社会	16.2 (63)
現代社会+学校設定科目	2.3 (9)
現代社会+政治経済	14.6 (57)
現代社会+政治経済+学校設定科目	1.5 (6)
現代社会+倫理	5.1 (20)
3. 倫理、政治・経済	9.0 (35)
倫理、政治・経済+学校設定科目	0.8 (3)
4. その他	1.0 (4)
無答	5.1 (20)
	100.0% (390校)

注)

1. 科目は、現代社会 倫理 政治・経済
2. 「必修修科目」は公民のうち「現代社会」または「倫理」・「政治・経済」

- ・「現代社会+倫理+政治・経済」・・・40.8%（159校）
- ・「現代社会」・・・16.2%（63校）
- ・「現代社会+政治・経済」・・・14.6%（57校）
- ・「倫理+政治・経済」・・・9.0%（35校）
- ・「現代社会+倫理」・・・5.1%（20校）

なお、上位3つの構成のし方が全高校の7割を超えている。全高校の中で科目構成し方が当該の1校のみに限られるのは10例。そして、同じ科目構成のし方が2校だけにみられるのは6例。3校だけにみられるのは1例。公民では、全高校における科目構成のしかたに、共通性が

高いことがわかる。科目数の少なさも影響しているだろう。

数学では、学習指導要領で示されている科目は、表1-4の脚注に示す6科目。「必修修科目」は「数学Ⅰ」（標準単位数3単位）の1科目である。

表2-4をみると「数学Ⅰ+4科目」の履修パターンが最も多く65.1%（254校）である。

表2-4 数学の履修

	計
1. 数学Ⅰ+4科目	65.1 (254)
数学Ⅰ+4科目+学校設定科目(1科目)	13.1 (51)
数学Ⅰ+4科目+学校設定科目(2科目以上)	3.3 (13)
2. 数学Ⅰ+3科目	5.9 (23)
数学Ⅰ+3科目+学校設定科目	1.0 (4)
3. 数学Ⅰ+数学A	2.6 (10)
4. 数学Ⅰ+5科目	2.3 (9)
数学Ⅰ+5科目+学校設定科目	0.8 (3)
5. 数学Ⅰ+数学Ⅱ+数学A又は数学B	1.3 (5)
上記の科目+学校設定科目	0.5 (2)
6. 数学Ⅰ+学校設定科目	0.3 (1)
無答	3.8 (15)
	100.0% (390校)

注)

1. 科目は、数学Ⅰ 数学Ⅱ 数学Ⅲ 数学A 数学B 数学活用
2. 「必修修科目」は、「数学Ⅰ」

各高校が設定する科目履修のタイプ（科目の構成のしかた）は24パターンみられた。そのなかで、次のような科目構成が順に多かった。

- ・「数学Ⅰ+数学Ⅱ+数学Ⅲ+数学A+数学B」・・・65.1%（254校）
- ・「数学Ⅰ+数学Ⅱ+数学Ⅲ+数学A+数学B+学校設定科目で1科目（演習、探究、特講、発展等の名称）」・・・12.6%（49校）
- ・「数学Ⅰ+数学Ⅱ+数学A+数学B」・・・5.1%（20校）
- ・「数学Ⅰ+数学A」・・・2.6%（21校）

なお、上位2つの科目の構成のし方が全高校の中で8割近い。全高校の中で科目構成し方が当該の1校のみに限られるのは13例。そして、同じ科目構成のし方が2校だけにみられるのは

3例。3校だけにみられるパターンは皆無である。各高校における科目構成のし方に、共通性が高いことがわかる。

理科では、学習指導要領で示されている科目は、表2-5の脚注に示す10科目。「必履修科目」は「科学と人間生活」（標準単位数2単位）並びに物理、化学、生物、地学の各「基礎」科目（各標準単位数2単位）から1科目選択する場合。あるいは、物理、化学、生物、地学の各「基礎」科目から3科目選択する場合である。なお、ここで仮に前者をA、後者をBと呼ぶことにする。

表2-5 理科の履修

	A. 科学と人間生活「基礎」が1科目	B. 「基礎」が3科目	AとBを共に充足する	計
1. 3科目	1.0 (4)	0.8 (3)		1.8 (7)
2. 4科目	0.3 (1)	1.3 (5)	0.8 (3)	2.3 (9)
3. 5科目	0.8 (3)	3.1 (12)	0.3 (1)	4.1 (16)
4. 6科目	0.8 (3)	30.3 (118)	1.8 (7)	32.8 (128)
5. 7科目		16.7 (65)	20.5 (80)	37.2 (145)
6. 8科目		5.9 (23)	6.7 (26)	12.6 (49)
7. 9科目		0.3 (1)	1.5 (6)	1.8 (7)
8. 10科目			0.8 (3)	0.8 (3)
9. その他	—	—	—	2.3 (9)
無答	—	—	—	4.4 (17)
	2.8 (11)	58.2 (227)	32.3 (126)	100.0% (390校)

注)

- 科目は、科学と人間生活 物理基礎 物理 化学基礎 化学 生物基礎 生物 地学基礎 地学理科課題研究
- 「必履修科目」は、「科学と人間生活」、「物理基礎」、「化学基礎」、「生物基礎」及び「地学基礎」のうちから2科目（うち1科目は「科学と人間生活」）又は「物理基礎」、「化学基礎」、「生物基礎」及び「地学基礎」のうちから3科目

表1-5をみると、必履修科目としてAを据えて、6科目設定のしかたが最も多く、30.3%（118校）を占める。ついで、必履修科目としてAとBの両方を充足する7科目設定のしかたが多く、20.5%（80校）を占める。

各高校が設定する科目履修のタイプ（科目の構成のしかた）は62パターン。このなかで、

次のような科目構成が順に多かった。

- ・「物理基礎+物理+化学基礎+化学+生物基礎+生物」・・・24.9%（97校）
- ・「科学と人間生活+物理基礎+物理+化学基礎+化学+生物基礎+生物」・・・16.7%（65校）
- ・「物理基礎+物理+化学基礎+化学+生物基礎+生物+地学基礎」・・・14.6%（57校）
- ・「科学と人間生活+物理基礎+物理+化学基礎+化学+生物基礎+生物+地学基礎」・・・6.2%（24校）
- ・「物理基礎+物理+化学基礎+化学+生物基礎+生物+地学基礎+地学」・・・4.4%（17校）

なお、上位3つの構成が全高校の約半数以上を占めるのに対して、全高校の中で科目構成のし方が該当の1校に限られるのは33例。同じ科目構成のし方が2校に限られているのが7例。同様に3校に限られるのは9例。全高校をみると、かなり多様な科目構成のし方があるといえよう。

最後に、外国語（英語）では、学習指導要領で示されている科目は、表2-6の脚注に示す7科目。「必履修科目」は「コミュニケーション英語Ⅰ」（標準単位数3単位）。

表2-6 外国語の履修

	計
1. コミュニケーション英語Ⅰ+4科目	36.2 (141)
コミュニケーション英語Ⅰ+4科目+学校設定科目	11.0 (43)
2. コミュニケーション英語Ⅰ+5科目	20.5 (80)
コミュニケーション英語Ⅰ+5科目+学校設定科目	4.9 (19)
3. コミュニケーション英語Ⅰ+3科目	10.3 (40)
コミュニケーション英語Ⅰ+3科目+学校設定科目	2.3 (9)
4. コミュニケーション英語Ⅰ+2科目以内	7.4 (29)
コミュニケーション英語Ⅰ+2科目+学校設定科目	1.5 (6)
5. コミュニケーション英語Ⅰ+6科目	2.1 (8)
コミュニケーション英語Ⅰ+6科目+学校設定科目	0.5 (2)
無答	3.3 (13)
	100.0% (390校)

注)

- 科目は、コミュニケーション英語基礎 英語表現Ⅰ 英語表現Ⅱ 英語会話 コミュニケーション英語Ⅰ コミュニケーション英語Ⅱ コミュニケーション英語Ⅲ
- 「必履修科目」は、「コミュニケーション英語Ⅰ」

表 1-6 をみると「コミュニケーション英語 I + 4 科目」の履修パターンが最も多く、36.2% (141 校) を占める。ついで「コミュニケーション英語 I + 5 科目」の履修パターンが多く、20.5% (80 校)。この 2 つの合計で全体の半数を超えている。

各高校が設定する科目履修のタイプ (科目の構成のしかた) は 63 パターン。その中で、次のような科目構成のし方が順に多かった。

- ・「英語表現 I + 英語表現 II + コミュニケーション英語 I + コミュニケーション英語 II + コミュニケーション英語 III」・・・32.8% (128 校)
- ・「英語表現 I + 英語表現 II + 英語会話 + コミュニケーション英語 I + コミュニケーション英語 II + コミュニケーション英語 III」・・・18.7% (73 校)
- ・「英語表現 I + 英語表現 II + コミュニケーション英語 I + コミュニケーション英語 II」・・・4.9% (19 校)
- ・「英語表現 I + 英語表現 II + コミュニケーション英語 I + コミュニケーション英語 II + コミュニケーション英語 III + 学校設定科目で 1 科目 (英語演習、課題研究等の名称)」・・・4.4% (17 校)
- ・「英語表現 I + コミュニケーション英語 I + コミュニケーション英語 II + コミュニケーション英語 III」・・・2.8% (11 校)

なお、上位 2 つの構成のし方が全高校の約半数を占めるのに対して、全高校の中で科目構成のし方が該当の 1 校に限られるのは 29 例。同じ科目構成が 2 校に限られているのが 12 例。同様に 3 校に限られるのは 7 例。全高校をみると、かなり多様な科目構成のし方を行っていることがわかる。

2) 教育課程編成の現状と改善点

次に、上記の科目の履修のし方の現状について

みていく。

まず、普通科では、一般的に、履修に関わって、類型とか、コースとか習熟度など用いて、科目履修に役立てている。そこで、高校でどの学年から設定するのか。結果は次のようである。

1. 1 学年 (年次) から設けている。・・・72.7%
2. 2 学年 (年次) から設けている。・・・19.3%
3. 3 学年 (年次) から設けている。・・・2.4%
4. 設けていない。どの生徒も 3 年間ほぼ同じ教育課程で学ぶ。・・・4.0%
5. その他 ・・・1.6%

結果をみると、高校入学時からコースや類型を設定する高校が 7 割超に達する。この結果は進学率との関連でみても有意差はみられない。普通科高校ではコース設定や類型の設定は当然のことと受け止められている。

では、普通科において「類型、コース、習熟度別などを設定」する理由は何か。選択率の順に示すと次のようである。

1. 文系、理系、スポーツ系など、生徒の能力や個性に対応するため・・・・・・・・・・35.3%
2. 国公立大学や難関私立大学等の難易度の高い進路実現に役立てるため ・・・・・・・・26.6%
3. 生徒の進路が多様化している現状を考え、多様な進路希望を実現するため・・・・23.1%
4. 学年進行に伴い学力差が大きくなり、学力差に対応した授業の実施のため ・・・・9.5%
5. その他 ・・・・・・・・・・3.3%
6. 一切設定していない ・・・・・・・・2.2%

結果をみると、生徒の能力や個性への対応、大学等への進路実現への対応、生徒の進路希望の多様化への対応、学力差の拡大への対応等が、コース設定の理由としてあげられている。この理由のうち、最も高い選択率は「生徒の能力や個性への対応」である。なお、進学率との関連

でみると、統計的に有意差がみられ、進学率上位校と中位校では「生徒の能力や個性への対応」が最も選択率が高く、下位校では「生徒の進路希望の多様化への対応」が最も選択率が高い。

なお、調査項目として、別に「必修科目でない選択科目を設定する場合、どのような観点から科目設定をしているか」という質問項目と選択肢を用意している。その結果をみると、選択科目の設定に関しては「生徒の進路希望や進路選択に、科目履修を生かせるよう選択科目を設定」への回答が86.3%に達する。統計的に有意差はみられないが、進学率上位校では、その選択率は92.0%。他方、下位校では79.3%。なお、生徒の学力差、生徒の興味・関心をもって学習できる科目、卒業後に必要な基礎学力の確実な習得、担当する教員の指導方針・興味・指導力量、担当可能な教員の配置等はあまり考慮されていない。

次に、改善点を表2-7でみてみる。調査では、改善点として5点を選択肢として設定し「勤務校の普通科の教育をもっと充実させるために、どのような点が改革できればよいか。」という設問で回答（回答は1つ）を求めた。

結果をみると、改善すべき点として最も回答が多いのは「1. 普通科目の授業は座学が中心となりがちなので、実験とか、調べ学習とか、発

表機会の増加など、アクティブラーニングをもっと取り入れた科目を増やすこと」。普通科目は教師主導の一斉教授の形式が伝統的に採用されているという認識があり、こうした授業のし方の改善を促す科目内容の編成のあり方を求めている。回答率は37.6%。

ついで、多いのが「2. 大学受験にも対応し、進学希望の大学や学部（希望する進路）に、より対応したカリキュラムを編成できるようにすること」を求めが33.1%。確かに、多くの私学がさまざまなコースや類型を設定し、進学に向けての対応策を展開しているが、こうした方向性をもっと進めようと考えている。

これに対して「4. 基礎学力充実のため、補充教育を行う科目（学校設定科目）の単位認定や単位数の設定をできるようにする」で7.5%。及び「5. 普通科だが、専門学科等のように、専門教科の修得も卒業に必要な74単位数に含めることを可能にする。例えば、就業体験等」への回答は2.7%と少ない。

上記の結果を進学率との関連でみると、有意差がみられる。進学率上位校と中位校では、共に普通科目における座学中心の授業形態を改善可能にするようなカリキュラム編成の工夫、並びに、生徒の進学希望に対応したカリキュラム編成を改善の方向とする、この2つの選択肢が

表2-7 あなたの高校で、特にカリキュラム編成でどのような点が改善できればよいか

	進学率			計
	上位	中位	下位	
1. 普通教科では座学が中心なので、実験、調べ学習、発表機会等アクティブラーニングを取り入れた科目をもっと増やす	42.1	40.9	29.8	37.6
2. 大学受験に対応し、進学希望の多い大学・学部（進路希望）により対応したカリキュラムを編成できるようにする	34.2	40.1	24.0	33.1
3. 必修の履修単位数等の規制緩和をし、生徒の興味・関心や意欲を高める教科・科目の単位数を学校独自に設定できるようにする	21.9	11.7	19.0	17.2
4. 基礎学力充実のため、補充教育を行う科目（学校設定教科・科目）の単位認定や単位数の設定をできるようにする	0.9	3.6	18.2	7.5
5. 普通科だが、専門学科等のように、専門科目の修得も卒業に必要な74単位数に含めることを可能にする。例えば、就業体験等	0.0	2.9	5.0	2.7
6. その他	0.9	0.7	4.1	1.9
	100.0 (114)	100.0 (137)	100.0 (121)	100.0 (372)

$\chi^2 = 50.21$ $p < 0.001$ $df = 6$

選ばれている。

他方、進学率下位校では、基礎学力の充実を図るカリキュラムの編成や専門科目の履修を可能とする単位履修の必要性を指摘する回答が高いこともわかる。

3. 普通科高校生の特徴と教育方針の達成

1) 普通科高校生の特徴とは

表3-1は校長に自校の高校生の特徴を尋ねている。13個の選択肢を用意し、特に当てはまる特徴を3つまで選択する形式で回答を求めた。

最も選択率が高いのは「1. 高校での学習や生活に満足している生徒が多い」であり、49.2%。ほぼ半数の校長がこの選択肢を選んでいる。とりわけ、進学率上位校では61.7%に達し、進学率との関係で統計的に有意差がみられた。ついで「2. 部活動に参加している生徒が多い」が選択され46.0%。さらに「3. 校則をきちんと守れる、躰のできた生徒が多い」も44.7%。これら3つの選択肢を選択した比率が高いことは、生徒の

行動のし方（行動規準）が私立高校の求める行動の規準に合致していることを示している。

その他としては「4. 在学中に就きたい職業とかやりたいこと（目標）をかなり明確に意識化する生徒が多い」も、進学率の上位校、中位校、下位校にかかわらず、30%前後の高い選択率である。この数値の高さから進路選択への主体的な態度がみられる生徒が多く在学していること、を推測できる。

言い換えると、選択肢の「11. ネットやゲームに夢中になり、授業や家庭学習に集中できない生徒が多い」とか、「13. どの大学でも変わらないといった進学意識を持つ生徒が多い」など、私立高校が求める行動の規準に沿い難い生徒は少ないと言える。

なお、その他の特徴を進学率との関連でみると「5. 国公立大・難関私学への進学を目指す生徒が多い」のは、進学率で上位校と中位校である。同様に、進学率上位校では「9. 系列大学への進学を当然と考えて、まじめに授業に取り組む生徒が多い」の数値が高いが、これは大学（短

表3-1 校長が受け止めている自校の生徒の特徴とは

	進学率			計	
	上位	中位	下位		
1. 学習や生活に満足している生徒が多い	61.7	48.9	37.7	49.2	**
2. 部活動に参加している生徒が多い	41.7	49.6	45.9	46.0	
3. 校則をきちんと守れる、しつけのできた生徒が多い	47.0	48.2	38.5	44.7	
4. 在学中に就きたい職業ややりたいこと（目標）をかなり明確に意識化する生徒が多い	32.2	28.5	31.1	30.5	
5. 国公立大・難関私学への進学を目指す生徒が多い	38.3	37.2	14.8	30.2	***
6. 中学校の時には欠席がちな生徒も、高校入学後は、授業にまじめに参加し、学力を伸ばす生徒が多い	11.3	21.2	50.8	27.8	***
7. 教科の学習よりも、部活動に力を入れる生徒が多い	4.3	11.7	23.0	13.1	***
8. 将来の進路をなかなか決められない生徒が多い	5.2	10.9	16.4	11.0	*
9. 系列大学への進学を当然と考え、まじめに授業に取り組む生徒が多い	21.7	8.8	2.5	10.7	***
10. 学習意欲が高く、学力の高い生徒が多い	11.3	10.2	6.6	9.4	
11. ネットやゲームに夢中になり、授業や家庭学習に集中できない生徒が多い	0.9	2.2	4.1	2.4	
12. 中途退学の生徒には、成績や意欲の低下よりも、経済的な理由の方が多	0.0	1.5	1.6	1.1	
13. 学歴より実力重視の風潮により、どの大学でも変わらないといった進学意識を持つ生徒が多い	0.0	0.0	0.0	0.0	
14. その他	1.7	1.5	0.0	1.1	

注) 進学率別にて、*は5%の水準で、**は1%の水準で、***は0.1%の水準で、有意差があることを示している。なお、回答の形式は、上記の14の選択肢から3つまで選択

大)の系列校と呼ばれる私立高校の進学状況の特色とも言える。

他方、進学率下位校で、より数値が高いのは「6.中学校の時には欠席しがちな生徒も、高校入学後は授業にまじめに参加し、学力を伸ばす生徒が多い」と「7.教科の学習よりも、部活動に力を入れる生徒が多い」である。この2つの回答には、カイ二乗検定値で進学率による有意差がみられる。

2) 私立普通科高校に感じる魅力とは

生徒は普通科における教育をどのように受け止めているのか。表3-2は、自校の生徒が普通科における教育にどのような魅力を感じているか、という受け止め方を尋ねている。12個の選択肢を用意し、特に当てはまる特徴を3つまで選択する形式で回答を求めた。

回答の特徴として、進学率との関連でみて最も選択されたのは「1.生徒の希望を叶える進路

指導ができていないこと(大学等への進路指導や就職指導の充実)」で64.9%。進学率の上位校(63.5%)、中位校(66.4%)、下位校(63.9%)とも高い選択率であり、統計的な有意差はない。進路指導の充実が私立普通科高校の最大の魅力である、と捉えている。

2位の選択率をみると、進学率の上位校と中位校では「2.国公立大学や難関私立大学への進路で実績を上げていること」が該当し、上位校で44.3%、中位校で54.7%。大学受験との関連で評価を受けることを魅力と捉える。他方、下位校の選択率2位は「3.生徒の学力水準への対応を第一と考えた授業が行われていること(きめの細かい授業)」で、選択率は45.1%と高い。

なお、進学率との関連では、上位校と下位校では統計的に有意差がみられる選択肢が多い。例えば、上位校ほど選択率が高いのは、「4.生徒同士や教師との関係が親和的で、いじめや暴力のない指導がしっかりなされている」と「6.系

表3-2 生徒が受け取る高校の魅力とは(校長によるその受け止め方)

	進学率			計	
	上位	中位	下位		
1. 生徒の希望を叶える進路指導ができていない(進路指導・就職指導の充実)	63.5	66.4	63.9	64.7	
2. 国公立・難関私立大学への進学実績	44.3	54.7	25.4	42.0	***
3. 生徒の学力水準への対応を第一と考えた授業ができていない(きめ細やかな授業)	37.4	39.4	45.1	40.6	
4. 生徒同士、教師と生徒の関係が親和的で、いじめや暴力のない指導ができていない	40.9	42.3	24.6	36.1	**
5. 総合選抜型(AO)入試、指定校や学校推薦等での進学に力を注ぐなど、進学指導が充実	30.4	34.3	41.8	35.6	
6. 系列大学等への進学体制が確立しているので、受験にあくせくすることなく、勉強等に取り組める	37.4	16.8	8.2	20.3	***
7. 普通教科の学習だけでなく、コースを設け、音楽、スポーツ、美術等の能力を伸ばす	3.5	10.2	26.2	13.4	***
8. 座学だけでなく、実験や実習、体験活動を取り入れ、普通教科の学習を工夫している	13.9	9.5	9.0	10.7	
9. 普通科だが、就職希望の生徒に面倒見のよい就職指導を行っている	0.0	0.7	19.7	6.7	***
10. 専門学科に相当する看護・医療系、保育、製菓・調理等のコースを設置	0.9	1.5	12.3	4.8	***
11. 地域との連携・交流を図り、地域に貢献できる職業人・地域人材を育てる	1.7	4.4	4.9	3.7	
12. 学校外での就業体験を取り入れて、職業観や勤労観を育てる	0	2.2	5.7	2.7	*
13. その他	1.7	1.5	0.8	1.3	

注) 進学率別にみて、*は5%の水準で、**は1%の水準で、***は0.1%の水準で、有意差があることを示している。

なお、回答の形式は、上記の13の選択肢から3つまで選択

列大学等への進学体制が確立しており、大学受験にあくせくすることなく高校で学習やスポーツができること」である。

他方、下位校ほど選択率が高いのは、「5.AO入試、指定校推薦入試、スポーツ推薦、学校推薦等での進学に力を入れており、大学や専門学校への進学指導が充実していること」とか「7. 普通教科の学習だけでなく、スポーツとか音楽、美術等の能力を伸ばせる環境（普通科の中にスポーツコースとか、音楽コースとか、芸術・アニメコース等）があること」とか「9. 普通科だが、就職希望生徒に、面倒見のよい就職ガイド

ンスを行っていること」及び「10. 専門学科に相当する、看護・医療系、保育・子ども教育、美容、食物、製菓・調理等のコースを普通科に置いている。」などである。大学入試における力点の置き方にみられる特徴とか就職を視野に置いた進路の指導といった点に、進学率の下位校の特徴がある。

3) 教育方針とその達成度

次に、私立普通科高校にみられる教育方針を取り上げ、その達成への認識の状況を探る。私立普通科高校で達成が目指されていると推定さ

表 3-3 高校の実践への取り組みと成果への認識

	十分に 上げ ている	まあまあ 上げて いる	成果は もう一歩	上げて いない・ 取り組 んでい ない	計	
1. 生徒の生活態度が良く、いじめや暴力、盗難のない安全・安心の学校生活を送ることができる指導ができています	0.5	11.7	64.8	22.9	100.0	
2. 「生活態度が良く、校則がよく守られている」といった、躰を重視する高校であるという点で評価が高い	2.7	18.9	55.7	22.7	100.0	
3. 不登校ぎみの生徒に対して十分なケアを行うなど、面倒見が良い	1.3	10.1	63.7	24.8	100.0	*
4. 中途退学者を出さないことを経営目標や方針に掲げ、学習や生活の状況を把握し、個別指導等の方策を考え、取り組んでいる	4.5	31.6	54.3	9.6	100.0	
5. 類型やコースを設け、少人数授業を導入し、きめ細かい指導を行い、一人ひとりの生徒の学力を伸ばしていること	4.3	23.8	56.4	15.5	100.0	
6. 学校行事（体験等）に力を入れ、文化祭や体育祭が盛り上がる楽しく充実した学校生活が実現し、行事が高校の伝統になっている	0.3	14.1	49.9	35.7	100.0	
7. 教科の知識習得だけでなく、コミュニケーションやプレゼンの能力を高める知識活用型のアクティブラーニング等の授業を導入している	9.9	55.2	29.9	5.1	100.0	***
8. 生徒が情報機器を活用できる教育環境や学習環境を整え、生徒の情報処理能力を高めている	7.7	44.8	38.1	9.3	100.0	**
9. 教育課程の編成や授業の方法をさまざまに工夫・改善して、生徒の学力の向上を図っていること	0.3	31.8	57.8	10.2	100.0	
10. 高大連携に取り組み、研究室訪問や大学教員による講演や授業を実施し、大学で学ぶ意義やすばらしさを教えている	11.2	33.6	42.9	12.3	100.0	***
11. 国際交流事業に取り組み、交換留学やホームステイ等を通じて、語学研修や異文化体験等を実施している	14.4	22.7	37.9	25.1	100.0	***
12. 大学への進学準備教育の充実を図り、大学入試において優れた実績を上げている	2.1	32.3	54.1	11.5	100.0	***
13. 進学指導だけでなく、就職指導でも、工業科等の専門学科高校に劣らず、実績を上げている	37.8	23.6	27.7	10.9	100.0	**
14. 就業体験やインターンシップに取り組み、将来設計能力を育てる普通科でのキャリア教育を充実させている	32.3	40.5	23.5	3.7	100.0	***
15. 部活動に力を入れており、県内や全国での大会で優秀な成績を上げて、部活動で高校の知名度が高くなっている	7.5	25.9	36.8	29.9	100.0	***

注) 進学率別にみて、*は5%の水準で、**は1%の水準で、***は0.1%の水準で、有意差があることを示している。

れる教育方針を取り上げ、その達成度をみていく。もちろん、取り上げた15個の教育方針はすべてが、すべての高校で明確に教育方針として掲げて達成を目指しているとは言えない。

表3-3は、教育方針に対応する各高校の教育実践を拾い出し、どの程度教育方針のねらいを実現化できているかを尋ねた。統計的処理として因子分析を行い、3つの因子が抽出された。1つは、番号1から6に示す項目である。生徒一人ひとりへの個別指導の充実、及びきめの細やかな対応を特色とするような学校生活の実現化に関わる因子で構成される。2つは、番号7から12の項目である。教育方法や学習環境の改善にかかわること、高大連携や国際交流事業など学校の枠内だけにとどまらない教育改善への取り組み、私立高校の特徴にもなっている大学進学に重点を置き取り組み等の因子で構成されている。3つは、番号13から15までの項目である。普通科における普通科目だけの教育を行うにとどまらず、専門学科の特色である職業の知識や技能を視野におく科目や教育内容、総合学科における将来設計能力の育成を目指した教育内容を取り入れること。あるいは、教育課程の枠外における部活動、これらは私立高校を特色づける因子になっている。

結果を詳しくみると、第1の因子(番号1から6)で「十分に成果を上げている」は少ない。ほとんどの高校は「成果はまだまだ十分でないとか、もう一歩である」という評価である。確かに、私立高校は公立高校に比して、学校規模(生徒数)が大きい割に、教員数が少ないという現実もある。こうした条件を加味すると、きめの細やかな個別指導を中心とした教育や指導は難しい点はあるだろう。なお、米印(*)で示した大学短大への進学率との関連では、高校間に有意差はない。

第2の因子(番号7から12)では、第1因

子に比べて「まあまあ成果を上げている」という評価の数値が高い。授業方法の工夫、教育機器を活用した情報処理能力の育成、高大連携事業への取り組み、国際交流事業への取り組み等、時代や社会が求める教育の改善等の取り組みには積極的なことがわかる。また、一部の私立高校の特色、特に都市部の私立高校の特色とも言える国公立大学や難関私立大学への準備教育に成果を感じている高校も少なくない。なお、第2の因子をみると、進学率との関連で統計的に有意差が強くみられる。

例えば「12. 大学への進学準備教育の充実を図り、大学入試において優れた実績を上げている」では、進学率上位校では「成果を十分に上げている」と「まあまあ成果を上げている」を合わせると、87.4%に達するが、進学率下位校では、その数値は46.7%と、有意差がみられた。つまり、第1の因子を構成する項目に比べて、第2の因子を構成する項目では、進学率の指標でみると、ほとんどの項目で有意差が認められた。

第3の因子(番号13から15)に関わっては、特に13と14の項目で「成果を上げている」と自己評価の高い回答が多い。

例えば「13.」の項目では、進学率上位校では「成果を十分に上げている」と「まあまあ成果を上げている」を合わせると8.2%だが、進学率下位校では66.1%に達する。また「14.」の項目では、進学率上位校では「成果を十分に上げている」と「まあまあ成果を上げている」を合わせても14.8%に過ぎないが、進学率下位校では45.1%に達する。

4. 私立普通科高校の教育成果を測る

1) 教育成果を測る指標

アメリカ合衆国における高校教育に関する研究では、高校教育の成果を測る指標として、ポーマ

ン等によると、学力形成 (Academic Achievement)、キャリア開発 (Career Development)、大学への進学 (college Preparation)、情報処理能力 (Digital Literacy)、中途退学 (Dropouts) の5つの指標を指摘している⁴⁾。本研究ではこの指標に着目し、わが国の多様化、個性化が進む各高校の教育の成果を実証的に解明しようと考えた。わが国では、ともすれば、従来から高校教育の成果を測る指標としては、普通科では大学への進学、及び専門学科における職業に関わる知識や技能の習得を中心に置いた職業的なキャリア開発に限定される傾向が強く打ち出されていたのではないかと問題意識から、もう少し広い視野からわが国の高校教育の成果に関して再検討を行う必要があるのではないかと考えた。

なお、調査では、高校の教育成果を測定する

指標として、ボーマン等の指標に準拠し、少し修正を施し、次の5つの指標を採用した。すなわち、1) 生徒の学力の向上、2) キャリア教育やキャリア開発、3) 大学等への進学、4) 生徒の学習能力や情報処理能力、5) 学習や生活の支援や指導。そして、指標毎に8～9の具体的な内容を独自に作成し、調査項目を設定した。以上の5つの指標を基に高校の教育成果を捉えることにした⁵⁾。

2) 普通科教育の成果

さて、教育成果の5つの指標に関して、高校の取り組みとして成果の上がっているもの(実践)に順位を付け、1位と2位の取り組みを尋ねた。以下、表4-1から表4-5で示す。表示のし方はすべて同様にした。

表 4-1 生徒の学力の向上に関して

	進学率上位の高校		進学率中位の高校		進学率下位の高校		計	
	1位選択	1 + 2位	1位選択	1 + 2位	1位選択	1 + 2位	1位選択	1 + 2位
1. 習熟度別学級編成を行い、生徒の学力や成績に対応した指導	33.9	41.7	32.1	42.3	28.7	38.5	31.6	41.0
2. 個別指導の充実(個別指導時間の設定等)や補習授業の導入	15.7	26.1	16.1	34.3	19.7	41.8	17.1	34.2
3. 夏休み等の休業日や土曜日(休日)の授業(補習授業や個別指導等)の実施	15.7	39.2	16.1	39.5	16.4	32.0	16.0	36.9
4. 新しい授業方法(個別指導や協同学習の導入等)に関する研究	9.6	22.6	7.3	16.1	3.3	12.3	6.7	16.9
5. 学力向上に向けての教員間の意思疎通と学力向上方策の検討	6.1	14.8	4.4	13.2	9.8	22.9	6.7	16.9
6. テストの回数とか、復習・予習の課題を多くし、学力向上への意欲を高めること	6.1	20.0	5.1	12.4	5.7	10.6	5.6	14.2
7. 学力が平均(校内での学年平均)よりも低い生徒への指導の工夫	1.7	7.8	8.8	13.9	4.9	16.4	5.3	12.8
8. 教師間での教材内容の研究(校内研修)の活発化・充実化	6.1	14.8	5.8	13.8	3.3	8.2	5.1	12.3
9. 学力が平均(校内での学年平均)よりも高い生徒への指導の工夫	3.5	9.6	2.9	11.7	4.9	9.0	3.7	10.1
10. その他	0.9	0.9	0.7	1.4	0.8	1.6	0.8	1.3
11. 特に成果は上がっていない	0.9	2.6	0.7	1.4	2.5	6.6	1.3	3.4

注) 成果の上がったと考える取り組みの第1位と第2位を、選択肢から選ぶ形式で回答を求めた。

表4-1は、生徒の学力の向上に関して、どのような取り組みをしているか。9つの取り組みを設定し、順位を付けて回答を求めた。表示は1位選択の選択率が高い順に行った。

1位選択で選択率が最も高いのは「1. 習熟度別学級編成を行い、生徒の学力や成績に対応した指導」という取り組みである。この取り組みを進学率別にみるとほとんど差がみられない。例えば、進学率上位校では1位選択で33.9%、2位選択まで含めると41.7%。中位校でもほとんど同じである。ただ下位校では1位選択で28.7%、2位選択まで含めると38.5%と数値の差は3～5%程度に過ぎない。学力向上の方策として、習熟度別編成が有効であると捉えている。

次いで選択率が高いのは「2. 個別指導の充実（個別指導時間の設定等）や補習授業の導入」である。1位選択と2位選択の合計では進学率別にみて上位校が26.1%、中位校が34.3%、下位校が41.8%であり、進学率の低いほど、選択率が高い。

もう少しみていくと、上位校で成果が上がっている取り組みは「4. 新しい授業方法（個別指導や協同学習の導入等）に関する研究」と「6. テストの回数とか復習・予習の課題を多くし、学力向上への意欲を高めること」である。他方、下位校でより成果の上がっている取り組みは「5. 学力向上に向けて教員間の意思疎通と学力向上方策の検討」と「7. 学力が平均（校内での

表4-2 キャリア教育やキャリア開発に関して

	進学率上位の高校		進学率中位の高校		進学率下位の高校		計	
	1位選択	1+2位	1位選択	1+2位	1位選択	1+2位	1位選択	1+2位
1. 将来の進路を考える機会を増やし、進路実現に向けて意欲的な態度を育てていく	29.6	65.3	35.0	66.4	28.7	55.7	31.3	62.6
2. ホームルーム活動の時間等を活用して、自分の今後の生き方・働き方を考えさせる	22.6	44.3	22.6	46.0	17.2	40.2	20.9	43.6
3. 卒業生や著名な職業人を招き、仕事への取り組み方を話してもらう機会を設けること	27.0	45.3	21.2	38.0	11.5	22.2	19.8	35.0
4. 理、文、医療系などコースを設定し、選択させる際には、関連する職業も視野に据え指導をする	13.0	25.2	10.9	20.4	9.8	17.2	11.2	20.8
5. インターンシップや就業体験の機会を設けて、就業の体験活動をおこなうこと	2.6	9.6	5.1	12.4	26.2	37.7	11.2	19.8
6. 「総合的な学習の時間」等で「道徳」に関する授業を行い、生き方・あり方を学ばせること	1.7	4.3	2.9	5.1	1.6	7.3	2.1	5.6
7. 個人にとっての職業の意味や役割等、職業を教え、職業観を育てる	1.7	1.7	0.7	5.1	2.5	7.4	1.6	4.8
8. 「まじめに働くことが大切である」といった勤労観を育てること	0.0	0.0	0.0	2.2	0.8	4.9	0.3	2.4
9. その他	1.7	1.7	0.0	0.0	0.8	1.6	0.8	1.1
10. 特に成果は上がっていない	0.0	2.6	1.5	4.4	0.8	5.7	0.8	4.3

注) 成果の上があったと考える取り組みの第1位と第2位を、選択肢から選ぶ形式で回答を求めた。

学年平均)よりも低い生徒への指導の工夫」である。

なお、選択率が全体で3番目に高い「3.夏休み等の休業日や土曜日(休日)の授業(補習授業や個別指導等)の実施」は、進学率とはほぼ関係なく、学力向上の方策として有効であるという評価がみられる。

以上の選択傾向から、上位校では、習熟度別編成での授業の実施、個別指導の充実や補習授業の導入、夏休み等の休業日や土曜日等の休日における授業の実施等で、取り組みの成果を認めている。他方、下位校では、習熟度別編成での授業の実施、個別指導の充実や補習授業の導入に加えて、学力向上に向けての教員間の意思

疎通と学力向上方策の検討等の取り組みで成果を認めている。

表4-2は、キャリア教育やキャリア開発に関して、どのような取り組みをしているか。8つの取り組みを設定した。

1位選択で選択率が最も高いのは「1.将来の進路を考える機会を増やし、進路実現に向けて意欲的な態度を育てていく」という取り組みである。進学率別にみるとほとんど差がない。例えば、上位校では1位選択で29.6%、2位選択まで含めると65.3%に達する。中位校でもほとんど同じである。ただ下位校では2位選択まで含めると55.7%と10%程度の開きがある。キャリア教育や開発では、進学率の高低にかかわら

表 4-3 大学等への進学に関して

	進学率上位の高校		進学率中位の高校		進学率下位の高校		計	
	1位選択	1+2位	1位選択	1+2位	1位選択	1+2位	1位選択	1+2位
1. 地元国公立大学や難関私立大学への合格者を増加させること	16.5	29.5	24.8	39.4	13.9	27.8	18.7	32.6
2. 一般入試の利用よりも、各種の推薦入試・AO入試での合格者を増やすこと	8.7	21.7	12.4	20.4	32.8	48.4	17.9	29.9
3. 授業の進度を進めるなどの工夫をし、入試への対策に力を入れること	22.6	34.8	18.2	41.6	12.3	24.6	17.6	33.9
4. 大学で学ぶことの意義や知的な探求の楽しさ・喜びを教えること	20.0	32.2	10.2	20.4	11.5	24.6	13.6	25.4
5. 入試問題(出題傾向)の研究・対策を行い、日々の授業でそれを生かすこと	17.4	34.8	10.2	26.3	8.2	23.8	11.8	28.1
6. 難関国立大学への合格者を増やすこと	7.8	13.9	10.9	13.8	9.0	9.8	9.4	12.6
7. 大学進学に伴って広がる職業選択の機会や大学での学習の効用を教えること	2.6	10.4	2.9	11.7	4.1	23.8	3.2	15.2
8. 予備校や塾の講師を招き、受験にかかわる学力向上の方法(授業のやり方)を学ぶこと	0.9	8.7	5.1	9.5	3.3	8.2	3.2	8.8
9. 入試問題(過去問)について教師間での検討会・研究会を活発化させること	0.9	4.4	2.2	8.0	1.6	1.6	1.6	4.8
10. その他	1.7	4.3	1.5	3.0	0.8	0.8	1.3	2.6
11. 特に成果は上がっていない	0.9	5.2	1.5	5.9	2.5	6.6	1.6	5.9

注) 成果の上がったと考える取り組みの第1位と第2位を、選択肢から選ぶ形式で回答を求めた。

ず、進路を考える機会を増やし、進路実現に向けての生徒の意欲的な態度の育成をめざす取り組みが選ばれている。これとの関連で、第1選択では数値的に差はないが、上位校では第2選択までの数値をみると、高くなっているのが「2. ホームルーム活動の時間等を活用して、自分の今後の生き方・働き方を考えさせる」である。

もう少しみていくと、上位校で数値が高いのは「3. 卒業生や著名な職業人を招き仕事への取り組み方を話してもらい機会を設けること」と「4. 理、文、医療系などコースを設定し、選択させる際には、関連する職業も視野に据え指導する」である。他方、下位校で数値が高いのは「5. インターンシップや就業体験の機会を設け

て、就業の体験活動を行うこと」である。

表4-3は、大学等への進学に関して、どのような取り組みをしているか。9つの取り組みを設定した。

1位選択で選択率が最も高いのは「1. 地元国公立大学や難関私立大学への合格者を増加させること」である。進学率上位校で16.5%、中位校で24.8%、下位校で13.9%と取り組みの成果が評価されている。しかし、数値それ自体は高くない。

続いて取り組みの評価が高いのは「2. 一般入試の利用よりも、各種の推薦入試・AO入試等での合格者を増やすこと」である。だが、上位校の数値があまり高くないのに比べて、下位校

表4-4 生徒の学習能力や情報処理能力に関して

	進学率上位の高校		進学率中位の高校		進学率下位の高校		計	
	1位選択	1+2位	1位選択	1+2位	1位選択	1+2位	1位選択	1+2位
1. 教科書で提示される基礎的・基本的な知識を確実に習得させること	33.0	42.6	41.9	55.1	52.5	66.4	42.6	54.9
2. 調べたこと・観察したこと、意見や感想等を、説明できるプレゼンの技能・能力を育てる	28.7	48.7	13.2	33.8	13.9	27.0	18.2	36.2
3. 読解力や理解力、数的思考力や分析力等テスト・試験で求められる学力を伸ばすこと	14.8	33.9	14.7	38.2	6.6	31.2	12.1	34.6
4. 国際化等に対応し、外国人講師を活用し、英語のコミュニケーション能力を高めること	9.6	34.8	12.5	25.7	3.3	14.0	8.6	24.7
5. パソコンの基本的なソフトを、授業等の学習や活動で積極的に活用できること	5.2	12.2	5.1	17.6	13.9	31.9	8.0	20.6
6. 授業等で司会の仕方や意見のまとめ方等、コミュニケーションの技術や能力を育てる	3.5	10.5	4.4	8.1	4.1	10.7	4.0	9.6
7. パソコンやタブレットを用い、授業や学習に役立つ情報検索の力を育てること	2.6	7.8	4.4	9.5	3.3	9.9	3.5	9.1
8. デイバート法などを取り入れ、自分の考えや意見を主張していく力を育てること	0.0	1.7	1.5	4.4	0.8	2.4	0.8	2.9
9. その他	0.9	0.9	0.7	0.7	0.0	0.8	0.5	0.8
10. 特に成果は上がっていない	1.7	6.9	1.5	6.6	1.6	5.7	1.6	6.4

注) 成果の上があったと考える取り組みの第1位と第2位を、選択肢から選ぶ形式で回答を求めた。

では、1位選択で32.8%、2位まで含めると48.4%に達する。この結果は、上位校や中位校に比べて、下位校の普通科高校の入試戦略（重点の置き所）が一般入試よりも、各種の推薦入試等への取り組みにより力を注ぐ現状を読み取ることができる。

もう少しみていくと、上位校で成果が上がっている取り組みは「3. 授業の進度を進めるなどの工夫をし、入試への対策に力を入れること」、「4. 大学で学ぶことの意義や知的な探求の楽しさ・喜びを教えること」及び「5. 入試問題（出題傾向）の研究・対策を行い、日々の授業でそれを生かすこと」等である。なお「3.」の授業の進度の工夫に関しては、中位校の数値も高い。

他方、下位校で数値が高いのは「7. 大学進学に伴って広がる職業選択の機会や大学での学習の効用を教えること」であろう。

表4-4は、生徒の学習能力や情報処理能力に関して、どのような取り組みをしているか。8つの取り組みを設定した。

1位選択で選択率が最も高いのは「1. 教科書で提示される基礎的・基本的な知識を確実に習得させること」である。もちろん、これは時代に対応して新しく求められる学習能力や情報処理能力と言うよりも、従来型の能力である。進学率との関連で見れば、上位校よりも中位校、そして下位校でより育成しようと考えられている。

表 4-5 学習や生活の支援や指導に関して

	進学率上位の高校		進学率中位の高校		進学率下位の高校		計	
	1位選択	1+2位	1位選択	1+2位	1位選択	1+2位	1位選択	1+2位
1. 不登校ぎみの生徒に、個別懇談や家庭訪問など、きめ細かな支援をすること	30.4	45.2	31.4	56.9	35.2	52.4	32.4	51.9
2. 授業の進度に遅れ気味で、学力の点で問題が多い生徒への支援や指導	20.0	27.8	19.0	32.9	10.7	27.1	16.6	29.4
3. 生徒間の人間関係の深刻なもつれや軋轢、例えばいじめ問題への対応や対策	13.9	40.9	16.1	34.3	11.5	27.9	13.9	34.2
4. 校則や時間が守れないなど、規範意識が乏しく生活態度の良くない生徒への指導	10.4	22.6	9.5	16.8	14.8	26.3	11.5	21.7
5. 授業等で消極的な態度をとる学習意欲の低い生徒への支援	7.0	21.8	5.8	21.1	11.5	27.1	8.0	23.2
6. 学習障害児等、特別な支援教育を必要とする生徒に手厚い支援教育をすること	6.1	9.6	6.6	11.0	9.0	18.8	7.2	13.1
7. 中途退学に至る傾向がみられる生徒に個別懇談や個別的に学習の支援を行うこと	7.0	15.7	8.0	16.8	4.9	10.6	6.7	14.5
8. 経済的に貧しい家庭のためアルバイト等で欠席が多く成績が悪い生徒の支援や指導	0.0	0.0	0.7	0.7	0.8	3.3	0.5	1.3
9. その他	3.5	3.5	0.7	0.7	0.8	0.8	1.6	1.6
10. 特に成果は上がっていない	3.5	14.8	0.7	7.3	0.8	5.7	1.6	9.1

注) 成果の上があったと考える取り組みの第1位と第2位を、選択肢から選ぶ形式で回答を求めた。

2番目に選択率の高い「2. 授業等で調べたこと・観察したこと、あるいは自分の意見や感想等を、わかりやすく説明できるプレゼンテーションの技能や・能力を育てること」は、進学率の上位校ほど数値が高い。

もう少しみていくと、上位校と中位校で成果が上がっている取り組みは「3. 読解力や理解力、数的思考力や分析力等テスト・試験で求められる学力を伸ばすこと」、及び「4. 国際化等に対応し、外国人講師を活用し、英語でのコミュニケーションの技術や能力を高めること」である。

他方、下位校で数値が高いのは「5. パソコンの基本的なソフトであるワード、エクセル、パワーポイントなどを、授業等の学習や活動で積極的に活用できること」である。上位校や中位校に比べて、顕著に数値が高い。今日では、高校生レベルであれば、誰もが利用できる必要のあるソフトとして定着しつつある状況を反映している。

表4-5は、学習や生活の支援や指導に関して、どのような取り組みをしているか。8つの取り組みを設定した。

1位選択で選択率が最も高いのは「1. 不登校ぎみの生徒に、個別懇談や家庭訪問など、きめ細かな支援をすること」である。これは進学率別にみて差が少なく、どの高校でも1位選択及び2位選択までの合計、ともに最も選択されている。中位校では、1位選択で31.4%、2位までの選択で56.9%である。下位校の選択率も同様に高く、1位選択で35.2%、2位までの選択で52.4%である。上位校も、1位選択で30.4%、2位までの選択で45.2%と高い数値である。

続いて選択率の高い取り組みは「5. 授業の進度に遅れ気味で、学力の点で問題が多い生徒への支援や指導」であり、上位校、中位校、下位校とも、2位までの選択率が27～33%の範囲

にある。

さらに進学率別に特徴を探ると、上位校と中位校の選択率が高いのは「3. 生徒間の人間関係の深刻なもつれや軋轢、例えば、いじめ問題への対応や対策」である。上位校の第2選択までの数値は40.9%と高い数値である。

他方、上位校に比べて、下位校の選択率が高いは「4. 校則や時間を守れないなど、規範意識が乏しく生活態度の良いくない生徒への指導」、 「5. 授業等で消極的な態度をとる学習意欲の低い生徒への支援」、及び「6. 学習障害児等、特別支援教育を必要とする生徒に手厚い支援教育をすること」である。なお、学習意欲の低い生徒への支援とか、特別支援教育を必要とする生徒への支援・教育は今日的な課題と位置づけられている。

おわりに

本稿では、私立普通科高校の教育課程編成の現状をデータにより明らかにすることからはじめて、教科・科目の構成や構成の際に重点を置く編成上の考え方をまず検討した。国の教育課程の実施状況の調査では、科目構成の状況の調査項目はみられない。こうした点を踏まえ、私立高校における教科の科目構成において構成の多様性の実態を明らかにするなかで、高校間の科目運営で、進学や生徒の学力等に即した重点の置き方に違いがある点を見いだした。

次に、教科の科目構成を密接に関連したコースやタイプの現状やその導入の考え方について明らかにし、これを踏まえて、校長のみた私立普通科高校生の特徴を探った。言うまでもなく、各高校での教育課程の編成は、国レベルの法的な基準に沿うだけでなく、各私立高校で学ぶ生徒の実態（生徒の能力や学力から卒業後の大学等への進路希望や進路実現への期待等）、さら

には、各高校の備える教育条件や生徒の進路実現可能にする条件等（高校の掲げる教育理念や教育方針等も含め）に依拠している。こうした立場にある各私立高校が自校で学ぶ高校生にどのような特徴を見だし、各高校の教育理念や教育方針に基づき、教育にあたっているのか。そして、各高校で学ぶ高校生がその高校教育に対してどのような魅力を感じていると、高校は受けとめているのか。調査結果をみると、進学率上位校と下位校では少し違いがあることがわかった。さらに、各校の教育方針の達成度も進学率との関連で違いがあることがデータで明らかになった。

続いて、私立普通科高校の教育成果を、5つの指標を設定し、検討していった。結果として、進学率別に（進学率を指標にして）みると、進学率上位の高校と下位の高校の間に、5つの教育成果指標に関わる各高校の取り組みにおける成果に関する認識に少し差異が存在することが明らかになった。

まず、教育成果の指標の1つである学力の向上に関する取り組みをみると、全体の取り組みの中で選択率が最も高いのは「習熟度別学級編成を行い、生徒の学力や成績に対応した指導」で、上位校と中位校では、この成果を認識する比率が高いという調査結果である。

また、上位校では「新しい授業方法」を研究すること、「テストの回数とか、復習・予習の課題を多く、学習意欲の向上を」図ること、校内研修の活発化・充実化といった取り組みを成果として認識する比率が高く、下位校では「個別指導の充実や補習授業の充実」とか「学力が平均よりも低い生徒への指導の工夫」で成果を認識する比率が高い。

この学力の向上という教育成果の指標に限らず、進学率の上位校と下位校における各取り組みに関する教育成果の認識の違いは、他の4つ

の教育成果に関してもみられた。

残りの4つの教育成果についても、その認識の差異を少しみておく。

キャリア教育やキャリア開発という教育成果の指標に関する取り組みでの成果の認識度をみると、全体の取り組みの中で選択率が最も高い「将来の進路を考える機会を増やし、進路実現に向けて意欲的な態度を育てていく」では、先の学力の向上の指標と同様に、上位校と中位校では、この成果を認識する度合いが大きいという調査結果である。

なお、上位校があげる成果としては「卒業生や著名な職業人を招き仕事への取り組み方を話してもらい機会の設定」と「理、文、医療系などコースを設定し、選択に際して、関連する職業も視野に据えた指導の実施」である。他方、下位校でより成果を上げている取り組みは「インターンシップや就業体験の機会を設け就業の体験活動を行うこと」である。

3つめの大学等への進学という教育成果の指標に関する取り組みでの成果の認識度をみると、全体の取り組みの中で選択率が最も高いのは「地元国公立大学や難関私立大学への合格者を増加させること」。中位校で、この成果を認識する度合いが大きい。

なお、上位校では「大学で学ぶことの意義や知的な探求の楽しさ・喜びを教える」と「入試問題の研究を行い、日々の授業で生かす」、中位校では「授業の進歩を進めるなどの工夫をし、入試への対策に力を入れる」、下位校では「一般入試の利用よりも、各種の推薦入試・AO入試等での合格者を増やす」と「大学進学に伴って広がる職業選択の機会や大学での学習の効用を教える」といった取り組みで成果を認識する度合いが大きいという結果である。

4つめの生徒の学習能力や情報処理能力という教育成果の指標に関する取り組みでの成果の

認識度をみると、全体の取り組みの中で選択率が最も高いのは「教科書で提示される基礎的・基本的な知識を確実に習得させる」である。従来型の能力観に近いが、進学率下位校でこの成果を認識する割合が大きい。

なお、下位校があげる成果としては「基本的なソフトであるワード、エクセル、パワーポイント等を、授業等の学習や活動で積極的に活用できる」、上位校では「授業等で調べたこと・観察したこと、自分の意見や感想等を説明できるプレゼンの技能や能力を育てる」と「国際化等に対応し、外国人講師を活用し、英語のコミュニケーションの技術や能力を高める」、中位校では「読解力や理解力、数的思考力や分析力等テスト・試験で求められる学力を伸ばす」で成果を認識する比率が高いというデータがでている。

5つめの学習や生活の支援や指導に関する取り組みでの成果の認識度をみると、全体の取り組みの中で選択率が最も高いのは「不登校ぎみの生徒に、個別懇談や家庭訪問等、きめ細かな支援をする」である。

なお、上位校と中位校の取り組みで選択率が高いのは「生徒間の人間関係の深刻なもつれや軋轢、いじめ問題への対応や対策」であり、下位校では「校則や時間を守れないなど、規範意識が乏しく生活態度の良くない生徒への指導」と「授業等で消極的な態度をとる学習意欲の低い生徒への支援」である。

以上の調査結果を踏まえて、本研究の課題を簡単に提示しておく。本調査は、私立高校における教科における科目構成の特徴として、多様性というタームで表現できる多様な科目構成のパターンを明らかにし、なぜそうした多様な科目構成が生み出されているかの要因をも合わせて探り、ボーマン等によるアメリカ合衆国における高校の教育成果を測る5つの指標を参考に

して、5つの指標に関する教育活動の取り組みを整理し、質問項目を作成した。この質問項目に基づき、調査を実施し、本調査のデータを得ることができた⁶⁾。

本研究は、わが国の高校の教育成果を考える場合、暗黙にうちに合意されている教育成果として想定されているのが、普通科では大学等の進学率、つまり、進学実績であり、専門学科では、特に職業学科とか実業学科と呼ばれた時代から就職率等の就職実績で測られる場合が主であった。こうした見方の浸透が、ともすれば普通科高校における学校経営の目ざす教育成果として、進学実績が中心に置かれることになった。こうした事情から、いわゆる有名高校と呼ばれる高校は進学実績で高い成果をあげる取り組みをしている高校であると保護者やマスコミ等から受け止められる。

こうした進学実績という1つの尺度で測られるようになると、いわゆる偏差値が社会にも学校教育にも大きな影響を及ぼすことになった。こうした進学の実績を過度に評価の中心に置く高校の教育成果の考え方を変革するためには、また、一人ひとりの生徒の個性や能力を育成するという課題を高校教育の中心に据えるためには、高校の教育成果に関する理解についての論議を深める必要がある。もちろん、今回の調査でも、従来から重視されてきた進学率をデータ分析の1つの視点として用い、5つの教育成果との関連で、各高校の特徴を探っている。その分析を進める中で、5つの教育成果に関わる各取り組みに、高校間において差違があることが明らかになり、各取り組みの重点の置き方に特徴があることがわかった。

今回の基礎的な調査データを踏まえた今後の高校教育を取り巻く社会の動きを考えると、少子化、情報化、学問の進歩等に向き合う必要があり、各高校では、入学してくる高校生の能力

や個性、社会の中でのよりよい生き方等に貢献することが課題となる。このためには、各高校が入学してくる生徒のために、どのような教育成果に力点を置き、その成果を生み出すにふさわしい取り組みを進めることができるかが重要となる。例えば、進学率上位校に求められる教育成果の1つである「学習能力や情報処理能力」に関して重点的に取り組みとしてどのような内容が考えられるか。あるいは、下位校に求められる「学力の向上」の教育成果に関わる重点的な取り組みではどのような内容が求められるか。もちろん、学校サイドから生徒に一方的に押しつける取り組みの内容となつては意味は乏しい。生徒が今在籍する高校に感じている魅力をいっそう高めるような取り組みが求められるであろう。例えば、表3-2の生徒が受け取る高校の魅力として「生徒の学力水準への対応を考えた授業ができてい」とか「総合選抜型入試、指定校や学校推薦等での力を注ぐなどの進学指導」等の取り組みは評価が高い。こうした「学力の向上」にかかわる教育成果を、教育課程の編成、教科・科目の構成の現状との関連で分析することも重要となる。他の4つの教育成果に関しても、同様に教育課程との関連の検討を含めて、取り組みの多面的な評価を行う必要がある。さらに、今後とも、各高校の取り組みを通してアウトプットすべき教育成果をデータに基づき実証的に明らかにしていくことが本研究の課題となろう。

注)

- 1) 高校教育の改革や生徒の進路選択や学習行動を対象とした調査研究として、参考にした研究として主に次のようなものがある。
 - ・耳塚寛明・樋田大二郎編(1996)『多様化と個性化の潮流を探る-高校教育改革の比較教育社会学-』学

事出版。

- ・樋田大二郎他編(2000)『高校生文化と進路形成の変容』学事出版。
 - ・斉藤武雄他編(2005)『工業高校の挑戦-高校教育再生への道-』学文社。
 - ・堀内達夫他編(2006)『新版専門高校の国際比較』法律文化社。
 - ・酒井明編(2007)『進学支援の教育臨床社会学-商業高校におけるアクションリサーチ』勁草書房。
 - ・筒井美紀(2006)『高卒労働市場の変貌と高校進路指導・就職斡旋における構造と認識の不一致-高卒就職を切り拓く-』東洋館出版社。
 - ・三戸親子(2001)「総合学科における生徒の進路意識形成」日本教育社会学会編『教育社会学研究』第69集東洋館出版社、103～122頁。
 - ・岡部善平(2005)『高校生の選択制カリキュラムへの適応過程-「総合学科」のエスのグラフィ-』風間書房。
 - ・荒川葉(2009)『「夢追い」型進路形成の功罪-高校改革の社会学-』東信堂。
 - ・中村高康編(2010)『進路選択の過程と構造-高校入学から卒業までの量的・質的アプローチ-』ミネルヴァ書房。
 - ・中澤渉・藤原翔編(2015)『格差社会の中の高校生-家族・学校・進路選択-』勁草書房。
- 2) なお、『学校基本調査報告書』(初等中等教育編平成28年度版)によると、平成28年3月時点の大学短大への進学率は、国立(66.8%)、公立(50.0%)、私立(65.0%)である。なお、全日制普通科に限れば、国立と公立と私立を合わせた進学率は、65.1%であり、国立・公立・私立による進学率の差はない。
 - 3) 文部科学省(2009)『高等学校学習指導要領解説総則編 平成21年11月』東山書房。
 - 4) Borman,K.M.,Cahill,S.E.,and Cotner,B.A.,(2007). The Praeger Handbook of American High Schools,Vol.1,Praeger Publishers.
 - 5) なお、高校教育の成果に関するこれまでの小論考に次のものがある。「高校教育の成果と教師の資質能力-普通科高校の校長調査から-」関西学院大学人文学会編(2016)『人文論究』第65巻第4号、87～110頁及び「専門学科高校の教育課程、教育成果、教師の資質能力」関西学院大学教職教育センター編(2017)『教職教育研究』第22号、15～

30頁。

- 6) なお、調査対象校の校長等に自校の教育成果を回答していただいたが、本調査の回答傾向や校長等の意見を参考に、わが国の私立高校の教育成果を測る指標の内容（もちろん、わが国の高校、学科、全日制・定時制等の取り組みすべてを視野に含め）を今後一層精緻化することも本研究の発展に向けての大きな課題ではある。

論文末の参考注)

本論文の「はじめに」の項の中で注記しているが、本調査研究に関連する一連の成果①から⑭を示しておく。

- ① 「高校教育の改革を考えるために」、関西学院大学教職教育研究センター編(2006)『教職教育研究-教職教育研究センター紀要-』第11号, 1～5頁.
- ② 「総合学科における教育の現状と課題-高校長を対象とした調査結果から-」関西学院大学教職教育研究センター編(2007)『教職教育研究-教職教育研究センター紀要-』第12号, 1～24頁.
- ③ 「総合学科高校への適応とその成果-総合学科高校生の学習・生活調査から-」関西学院大学教職教育研究センター編(2008)『教職教育研究-教職教育研究センター紀要-』第13号, 1～17頁.
- ④ 「高校教育改革と専門学科-高校長を対象とした調査結果から-」関西学院大学教職教育研究センター編(2009)『教職教育研究-教職教育研究センター紀要-』第14号, 1～13頁.
- ⑤ 「総合学科高校の成果を探る-高校長等を対象とした調査結果から」関西学院大学教職教育研究センター編(2010)『教職教育研究-教職教育研究センター紀要-』第15号, 25～36頁.
- ⑥ 「私立高校の特色ある教育に関する調査研究-高校が考える魅力と運営課題」関西学院大学教職教育研究センター編(2011)『関西学院大学教職教育研究センター紀要-』第16号, 27～43頁.
- ⑦ 「高校生の学習観」, 関西学院大学人文学会編(2012)『人文論究』第61巻第4号, 51～74頁.
- ⑧ 「大学進学率からみた普通科高校-公立普通科高校の校長調査から」関西学院大学教職教育研究センター編(2012)『教職教育研究-教職教育研究センター紀要-』第17号, 23～36頁.
- ⑨ 「進学高校における高校生の学習観」, 関西学院大学教職教育研究センター編(2013)『教職教育研究-教職教育研究センター紀要-』第18号, 9～23頁.
- ⑩ 「総合学科高校の現状と求められる教師の資質能力-高校長等を対象とした調査結果から-」関西学院大学教職教育研究センター編(2014)『教職教育研究-教職教育研究センター紀要-』第19号, 11～28頁.
- ⑪ 「総合学科高校における高校生の学習観」関西学院大学教職教育研究センター編(2015)『教職教育研究-教職教育研究センター紀要-』第20号, 11～20頁.
- ⑫ 「高校教育の成果と教師の資質能力-普通科高校の校長調査から-」関西学院大学人文学会編(2016)『人文論究』第65巻第4号, 87～110頁.
- ⑬ 「専門学科の現状と課題に関する調査-公立専門学科高校の校長等調査から-」関西学院大学教職教育研究センター編(2016)『教職教育研究-教職教育研究センター紀要-』第21号, 11～27頁.
- ⑭ 「専門学科高校の教育課程, 教育成果, 教師の資質能力-校長調査から-」関西学院大学教職教育研究センター編(2017)『教職教育研究-教職教育研究センター紀要-』第22号, 15～30頁.

Abstract

A Study of the Taking Course regarding Combinations of Subjects and the Educational Outcomes of Private Upper Secondary Schools.

– From a survey of principals

Osao MINAMIMOTO

Since the 1990s, educational reforms in Japan have been progressing toward individualization and diversification. The purpose of this research is to empirically clarify the actual situation on the design of the curriculum and educational outcomes of private upper secondary schools. According to three goals of the questionnaire survey administered to the private upper secondary school principals (390 respondents), following findings were obtained.

This survey has three goals.

The first goal is to examine the current status of taking courses. So, I selected five subjects, Japanese, geography and history, civics, mathematics, science, and foreign languages, and clarified the characteristics of diversity seen in course taking regarding combinations of subjects in each subject. In addition, I examined issues that should be improved in the curriculum formation of each upper secondary school.

The second goal is to explore the characteristics of private upper secondary school students as seen by the principal. How does each high school perceive that its high school students are attracted to high school education? Looking at the results of the survey, it was found that there was a difference between the high-ranking schools and the low-ranking schools, using the rate of advancement to higher education as an index. In addition, the data revealed that there were differences in the degree of achievement of the educational policies of each school in relation to the rate of advancement to higher education.

Thirdly, Borman, K.M., and others examined the outcomes of high school education in the United State and found five indicators to measure the outcomes. Based on their five indicators of Academic Achievement, Career Development, College Preparation, Digital Literacy, and Dropouts, I clarified the educational outcomes of the private upper secondary schools. Looking at the results of the survey, it was found that characteristic differences were observed in each of the five outcomes between the high-ranking schools and the low-ranking schools, using the rate of advancement to higher education as an index.

Keywords: taking course regarding combinations of subjects, attractiveness of the private upper secondary schools that the principal thinks, the outcomes of the private upper secondary schools.